

主 題：絶望の中で試される信仰
聖書箇所：民数記 14章1-38節

旧約聖書の民数記14章をお開きください。今日はモーセによって遣わされた12人の斥候たち、スパイたちについて話をしたいと思います。エジプトを脱出したイスラエルの民は神が約束されたカナンの地を目指して旅を始めました。そして、彼らはカデシュ・バルネアまでやって来ました。

(地図《征服前のカナン》を見てください。12人の斥候たちがカナンの地に入っていきますが、そこにいろんな人々が住んでいてその名が書かれています。どこにどの人たちが住んでいたのかを知るために地図が参考になるでしょう。カデッシュ・バルネアは載っていません。もっと南の方です。)

そこで主はモーセにカナンの偵察のために12人の斥候を送るようにと命じています。彼らは40日かけてカナンを訪れます。彼らが歩いた距離はどれ位だったのか？実際の資料は少なかったのですが、ある本には往復約805kmではなかったと書かれています。彼らはカナンの地という神が約束されたその地を調査に行くのです。問題だったのは、彼らがイスラエルの民に為した報告です。12人の報告は、主のみことばに従ってカナンを攻めることに賛成した二人と、それに反対をした10人の二つのグループに分かれたのです。「行こう」という二人と「止めよう」という10人です。悲しいことに、この「止めよう」という10人の声が勝つのです。10人に従った民は悲しいことに自分たちの上に大変な悲劇を招くことになるのです。

私たちが問いかねたいことは、このイスラエルの民はエジプトの地にあっても、また、エジプトを出てもたくさんの奇蹟を目撃した人たちです。紅海を渡ることもあったし、神が昼も夜も雲の柱として火の柱としてともにおられ、彼らを守られ彼らの必要を満たして来られました。そのような私たちが経験したことのないような大変な奇蹟を経験していながら、なぜ神に逆らう選択をしたのか？斥候たちも、そして、イスラエルの民も…。今朝私たちはその理由を学んでいきます。なぜなら、実は、彼らと私たちは非常によく似ているからです。私たちも彼らと同じようなことをします。同じような失敗をします。そして、この10人は自分たちの愛する者たちや周りの人たちに災いをもたらしたのです。祝福ではなく災いです。私たちは彼らの失敗をしっかり学んで、災いではなく祝福をもたらす者になりたいです。また、この主に従い通した二人の斥候たちの歩みからも学ぶことです。

今日は「父の日」ですが、私たち男性は家庭における「長」であって、それゆえに私たちは家族に祝福をもたらす者でありたいと願います。ですから、父親としても母親としても子どもとしても、信仰者であるひとり一人がこのレッスンを通して私たちはどんなときにも、どんなことがあってもどのように生きることが神の前に喜ばれるのか、どんな生き方を神は望んでおられるのか、そのことをごいっしょに学んでいければと思います。

まず、13：17-20にモーセが12人の斥候を遣わすのですが、その目的、命令が記されています。「17 モーセは彼らを、カナンの地を探りにやったときに、言った。「あちらに上って行ってネゲブに入り、山地に行つて、18 その地がどんなであるか、そこに住んでいる民が強いかわいかな、あるいは少ないか多いかを調べなさい。19 また彼らが住んでいる土地はどうか、それが良いか悪いか。彼らが住んでいる町々はどうか、それらは宿営かそれとも城壁の町か。20 土地はどうか、それは肥えているか、やせているか。そこには木があるか、ないかを調べなさい。あなたがたは勇気を出し、その地のくだものを取って来なさい。」その季節は初ぶどうの熟すころであった。」、そして彼らはこの命令を受けて約束の地カナンへと向かうのです。

そして、先ほど見たように彼らは40日かけてこの地を巡りました。そして、イスラエルの民の許に戻って来て報告をするのです。先に話したように12人の中の10人が為した報告は、自分たちだけが神に従わないだけでなく、民も同じように従わないように神に逆らうようにと導いたということです。大変な悲劇です。この10人についてみことばは私たちに彼らがどんな人たちだったのか？なぜ、このようなことをしたのかを教えているので見ていきましょう。

☆10人の斥候たち、また、イスラエルがどうして神に逆らう選択をしたのか、その理由を学ぶ

A. 主が喜ばれなかった人たち : 民に災いをもたらした10人の斥候たち

1. 彼らの行い : 10人の斥候たち

彼らが何をしたのか？14：1には「全会衆は大声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。」とあります。報告を聞いた民はこのような反応をするのです。その後2-4節「2 イスラエル人はみな、モーセとアロンにつぶやき、全会衆は彼らに言った。「私たちはエジプトの地で死んでいたらよかったのに。できれば、この荒野で死んだほうがましだ。3 なぜ【主】は、私たちをこの地に導いて来て、剣で倒そうとされるのか。私たち

の妻子は、さらわれてしまうのに。エジプトに帰ったほうが、私たちにとって良くはないか。」:4 そして互いに言った。「さあ、私たちは、ひとりのかしらを立ててエジプトに帰ろう。」、民はモーセとアロンに対して「つぶやく」のです。同じように、14:36にも「モーセがかの地を探らせるために遣わした者で、帰って来て、その地について悪く言いふらし、全会衆をモーセにつぶやかさせた者たちも。」と記されています。彼らはカナンの地を訪れました。そして、ある結論に達するのです。戻って来て彼らが言うことは「ダメだ、あそこに上って行ってはいけない」と悪い報告をして、民はモーセとアロンにつぶやくのです。モーセとアロンに逆らうように、引いては神に逆らうようにと彼らは働いたので

彼らが為した報告がすべて悪かったわけではありません。13:25から見ると「:25 四十日がたって、彼らはその地の偵察から帰って来た。:26 そして、ただちにパランの荒野のカデシュにいるモーセとアロンおよびイスラエルの全会衆のところに行き、ふたりと全会衆に報告をして、彼らにその地のくだものを見せた。:27 彼らはモーセに告げて言った。「私たちは、あなたがお遣わしになった地に行きました。そこにはまことに乳と蜜が流れています。そしてこれがそのくだものです。」と。彼らの報告は確かに事実でした。約束されたところはとてもすばらしいところだったと。実は、イスラエルがエジプトを出たときに神は彼らに約束を与えました。その約束は彼らを約束の地に導き入れるということです。その土地がどんなところであったのか？出エジプト記:3:8には「わたしが下って来たのは、彼らをエジプトの手から救い出し、その地から、広い良い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘテ人、エモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のいる所に、彼らを上らせるためだ。」とあります。3:17にも同じように「…乳と蜜の流れる地へ上らせると言ったのである。』」と書かれています。

非常に豊潤で農業に適した土地です。また、乳というので酪農にも蜜といって養蜂にも最適なところでした。大変潤っていてすばらしいところだったのです。神はそこにイスラエルを連れ上ると約束されたのです。だから、喜び勇んでそこに向かっていけばいいものを彼らはそうしなかったのです。特にこの10人の斥候たちは…。実際に彼らはそこに行ってそこがどれ程すばらしいかを見て来たのです。それなのにそこに進んで行こうとしなかった。なぜでしょう？もう少し彼らのことを知ることができます。

2. 彼らの行いの要因

彼らの行いの要因をひと言で言うなら、彼らは大変不信仰だったということです。その不信仰さを表す表現がここに七つ出ています。

1) 主を侮る : 14:11をご覧ください。「【主】はモーセに仰せられた。「この民はいつまでわたしを侮るのか。…」と、この「侮る」とは「軽蔑する、ひどく嫌う」ということです。イスラエルの民、そして、10人の斥候たちは、全知全能である唯一の神を神として扱おうとせず、神にふさわしい敬意を払わなかったということです。この神を信じ信頼するに値するお方であるとしなかったのです。

主を侮るとはそういうことです。

2) 主を信じない : 11節の後半「…わたしがこの民の間で行ったすべてのしるしにもかかわらず、」、つまり、イスラエルの民に対して神は様々な奇蹟のみわざを為された、それでも「いつまでわたしを信じないのか。」、主のみわざを見ていながら彼らは主を信じないと。この「信じる」とは「信頼する」という意味です。主は何度もご自身が全能であるということ、不可能を可能にすることができる、この方のうちには何一つ不可能はないということを証明して来られたにも関わらず、まだこの人たちはこの方に信頼を置こうとしないのです。

私たちが注意しなければいけません。神を知っていると言いながら実生活において神を信頼していないなら、彼らと余り変わりません。

3) 主を試みた : 14:22「エジプトとこの荒野で、わたしの栄光とわたしの行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、…」と、彼らはシナイ山で主の栄光に覆われました。多くのしるしを見ていながら「このように十度もわたしを試みて、」と、十度という回数よりもこれが彼らの特徴であったことを記しているのです。どんな神のみわざを見ても、神の栄光を見ても彼らは「主をためす」者でした。

では、「主をためす」とはどういうことなのか？ここで出エジプト記17章を見てください。何があったのかは皆さんよくご存じです。エジプトを出て来たイスラエルの民はシナイ山へ向かいます。南下して行くのです。彼らはレフィディムで宿営します。17:1-2「:1 イスラエル人の全会衆は、【主】の命により、シンの荒野から旅立ち、旅を重ねて、レフィディムで宿営した。そこには民の飲む水がなかった。:2 それで、民はモーセと争い、「私たちに飲む水を下さい」と言った。モーセは彼らに、「あなたがたはなぜ私と争うのですか。なぜ【主】を試みるのですか」と言った。不思議な会話です。「水をください」ということは間違っていますか？私たちの必要を神に求めてはだめなのですか？とそのように私たちは思います。でも、モーセはここで「なぜ【主】を試みるのですか」と言いました。というのは、モーセは彼らの心を見抜いていたからです。

どういうことか説明します。その答えが書かれているのが7節です。「それで、彼はその所をマサ、また

はメリバと名づけた。それは、イスラエル人が争ったからであり、また彼らが、「【主】は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、【主】を試みたからである。」「マサ」とは脚注にある通り「試み」、「メリバ」は「争い」という意味です。こういうことです。イスラエルの民には主が自分たちの中におられるということはもう疑う余地のないことです。最初に言ったように、神がずっとともにいることは実際に自分たちの目で見ることができたし、いろんな奇蹟を為さったからです。だれ一人それを疑うことはないのです。それでいながら彼らは神に何を言ったのか？「もし神さま、あなたが水を与えてくださったなら、あなたが我々の中にいることを信じます。もし与えてくださらなければ、あなたが私たちのうちにいることを信じません。」と、これが人々が実際に心に思っていたことです。

なぜ、これが問題なのか？本来なら、彼らは神は必要をちゃんと与えてくださるという信仰をもって生きるはずでした。でも、彼らは「水が欲しい、今すぐ欲しい」と、そこで神に言うのです。「今くれたらあなたがうちにいることを信じるけれど、くれなかったら信じない」と。こうして、自分たちが欲しいときにそれが与えられるようにと神をためすのです。神はイスラエルの民の中にご自分がいることを民が信じることを願っていました。だから、もし神が水をくれたら信じるけれど、くれなかったら信じないと言えば神はきっとそれを願っておられるから私たちに水をくれるに違いないと、そのように考えて神が水をくれるかどうかをためすのです。

彼らは自分たちの欲しいものを手に入れたいと神を試みるのです。私たち信仰者は神は必ず必要をくださると信じています。彼らは自分たちが欲しいときに欲しいものを得たかった。そのために神にくれたら信じるけれどくれなかったら信じないと、神にプレッシャーをかけて、今欲しいときにください、くれるかどうか神をテストするのです。

私たちの信仰はそうであってはなりません。私たちの信仰は神の約束を信じるということです。何かを神の前に求めることは間違っていないです。でも、自分のタイミングと神がお与えくださるそのときが違ったとしても、私たちは主の約束を信じて待ちます。今必要なのに今与えられなかったら「神さま、なぜくれないのですか？」と神に文句を言うのではなく、今必要だと思ってもそれが最善ではないと自らに言い聞かせます。なぜなら、神を知っているからです。神だけがいつかをご存じです。何が必要かをご存じです。私たちに分かりません。勝手に「これが最善だ。今が最善だ。」と知っているに過ぎないのです。そして、それに答えてくれなければ神に対して不満を覚えるのです。

私たちがもう一度覚え、そして、しっかりと立たなければいけない真理は「神は間違うことがない。神だけが最善を知っておられる。」です。そして、神の最善が成されるときに神の栄光が現れるし、私たち自身の信仰も成長するのです。こういうことです。私たちは神の前に願ったものを与えていただいたから満足するのではありません。主のみこころが成されることに満足を見出すのです。もし、私たちが「神さま、これをください。これをくれなければ…」とそういう信仰者であるなら、決して満足することはないでしょう。常に、あなたの中には不満が渦巻いています。「なぜ、こんなに願っているのにくれないのですか？なぜ、こんなに求めているのに何もしてくれないのですか？」と、そういうところから私たちは「主の最善は必ず成される」と、自らに対して「このお前は何を言うのか、この方は神だ。主よどうぞ、あなたのみこころを喜んで受け入れ、みこころを喜ぶ信仰者に私を変えてください。」と言うのです。

たとえば、私たちは病気を治してほしいと祈ることは間違っていないです。そう願うことは間違っていないです。当然、そのように祈るでしょう。でも、私たちは何度も祈っても、群れとしても祈っても、病気が癒されることなくむしろ悪化したらどうしますか？神に感謝しますか？それとも神に不満を言いますか？「どうしてなのですか、神さま…」と。もし、私たちが神に不満を言うなら私たちの信仰は「私の欲しいものをください。そうすればもっとあなたを愛しますから。私の願い事を引き上げてくださったなら、私はもっとあなたに忠実になります。」と、そのような信仰の歩みをしていませんか？私たちに必要な歩みは「この方は最善しか成すことができない。」です。神は罪を犯す方ではありません。神は失敗することはありません。神が為すことは常に最善です。ですから、私たちはこの方が為されるみこころを喜んで感謝をもって受け入れようとするのです。

私たちの祈りは「神さま、これをください。どうしてもください。何があってもください。これをくだされば…」ではなく、「神さま、あなたのみこころを為してください。そして、私がそれを喜んで受け入れるように私を助けてください。」です。ですから、願っていることと違っても信仰者は主のみこころが為されることを喜ぶのです。たとえ病気が悪化してもそれを喜んで受け入れる。「神さま、もう少しのちを与えてほしい」と祈っていても神がお取りになることがあります。それも神に感謝をするのです。なぜなら、神は失敗を犯されないので。

このイスラエルの民は、自分たちの欲しいものをそのときに求めたのです。そして、そのようにしてくれるかどうかと神を試すのです。そのような信仰の歩みに私たちは倣ってはなりません。願わくは、

私たちはいつも神のみこころを求めて、それを私たちの喜びとして生きる者になりたいものです。

4) 主の声に聞き従わなかった : 14 : 22の後半に「…わたしの声に聞き従わなかった者たちは、みな、」とあります。神の奇蹟を見ながら、主のみわざを見ていながらも、主の言われることに従っていかうとしなかったのです。神の声を聞いてもそれに従っていかうとしない。今で言うなら、私たちはみことばを見てそこに記されている神のみこころに従って生きようとはしますが、この人たちはそうではなかったということです。

5) 主につぶやいた : 14 : 27を見てください。「いつまでこの悪い会衆は、わたしにつぶやいているのか。わたしはイスラエル人が、わたしにつぶやいているつぶやきを、もう聞いている。」と、主への反抗や不信の行いです。また、このことばには正式に任命された権威に対する不従順、反抗という意味があります。神が為されることに対していつも不満なのです。「なぜ神は…、そんなことは願っていないのになぜこんなことを起こすのか？」と、そうして彼らは主に対してつぶやき続けていたのです。そして同時に、主が立てられたモーセとアロンに対するつぶやきも、彼らが反抗していた様子が14章に記されています。

6) 主への背信の罪を犯した : 14 : 33「あなたがたの子どもたちは、この荒野で四十年の間羊を飼う者となり、あなたがたが死体となってこの荒野で倒れてしまうまで、あなたがたの背信の罪を負わなければならない。」、この「背信」ということばには「売春、不品行」という意味があります。つまり、彼らは主に対して誠実ではなかったということです。この真の神だけを愛しこの方に従っていく、そうではなかった。

7) 主に反抗した : 34節に記されています。「あなたがたが、かの地を探った日数は四十日であった。その一日を一年と数えて、四十年の間あなたがたは自分の咎を負わなければならない。こうしてわたしへの反抗が何かを思い知ろう。」と。主に反抗する者たちでした。「わたしへの反抗」とは「偽りの口実、誘惑」という意味があります。いつも自分たちのやりたいことをして、そして、神によって責められるといろんな言い訳をするのです。彼らは神に従おうなどと思っていません。神に抵抗し、反発し続けるのです。

ですから、こうして七つの特徴を見たときに、どうりで神が怒られたことが分かります。主を侮る者たちであり、主を信頼しない者たちであり主を試みる者たちであり、主の声に従わないでいつも不満を抱いて不信であり誠実でなかった。そして、いつも神に対して反発をしている。

こうして、今、10人の斥候たち、民の問題を見て来ました。ただ、こうして見て来ても何かがあったはずなのです。約束の地に行きました。恐らく、彼らは希望をもっていたはずです。神が約束されたところはどんなところなのだろう？と。でも、そこから帰って来た時に彼らがしたことは、悪い知らせを告げることでした。イスラエルの人々の心をくじくのです。彼らが神に従わないようにと働くのです。何かがあったのです。実は、そのことが聖書に記されています。

3. 彼らの行いの動因

こういう結果を導き出した原因はいったい何だったのか？この選択のきっかけは何だったのか？この選択に至る経過、過程を皆さんに知ってもらいたいのです。これらは私たちと全く同じです。この10人の斥候たちが約束地に行って、先に見たように「そこにはまことに乳と蜜が流れています。」と報告をしました。13 : 26-27です。「そしてこれがそのくだものです。」と見せるのです。すばらしいところだったと…。続く28節を見てください。「しかし、」という接続詞で始まっています。その後「…その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく、そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。」、「見ました」ということばに注目してください。実は、彼らはカナンを訪れたときに四つものを見ているのです。

1) 土地と産物 : 13 : 27にあります。「そこにはまことに乳と蜜が流れています。」、土地とその産物を見たのです。すばらしいものでした。非常に潤った地であり、そこではこんな果物が育っていると。

2) 住む人々 : 13 : 28-29「:28 しかし、その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく、そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。」、斥候たちはツインの荒野からネゲブへと上がっていきます。「:29 ネゲブの地方にはアマレク人が住み、山地にはヘテ人、エブス人、エモリ人が住んでおり、海岸とヨルダンの川岸にはカナン人が住んでいます。」、そして、彼らはカナンを北へ北へと上がっていくのです。彼らは土地だけでなくそこに住む人々を見たのです。モーセは言いました。13 : 18「その地がどんなであるか、「そこに住んでいる民が強いか弱いか、あるいは少ないか多いかを調べなさい。」と。その通り彼らは実践するのです。そして、結論を言います。13 : 28「しかし、その地に住む民は力強く、」「言われた通り見て来ました。彼らは「力強く」とても強力です。」と。

3) 住む町々 : 28節「その町々は城壁を持ち、非常に大きく、」とあります。それぞれの町には城壁があったのです。この城壁とは「近づき難い、弱点がなく攻撃できない」、そういう城壁でした。見たところ「これはもう難攻不落だ。どんなに攻めても倒すことは出来ない。攻め入ることなどできない。」

と、なぜなら、「非常に大きく、」と書かれています。

4) 特筆すべきことがあった : 28節の最後には「そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。」とあります。「アナクの子孫」とは何でしょう？申命記2章にそのことが記されています。10、11節「:10 —そこには以前、エミム人が住んでいた。強大な民で、数も多く、アナク人のように背が高かった。」と、ここでエミム人とアナク人を比較しているのです。この人たちは死海の東側に住んでいました。どちらも「背が高かった。」とあります。「:11 アナク人と同じく、彼らもレファイムであるとみなされていたが、モアブ人は彼らをエミム人と呼んでいた。」と、アナク人もエミム人も背が高く彼らは「レファイム」と呼ばれていたと。「レファイム」とは「巨人」という意味です。

3 : 11に実際にどういう人がいたのか書かれています。「——バシャンの王オグだけが、レファイムの生存者として残っていた。見よ。彼の寝台は鉄の寝台、それはアモン人のラバにあるではないか。その長さは、規準のキュビトで九キュビト、その幅は四キュビトである——」と。オグ王のベッドのことです。そのサイズは長さ9キュビト=396cm、幅4キュビト=176cm、そんなベッドが必要であったということです。

民数記に戻って、13 : 33「そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。」とこの「ネフィリム人」も巨人のことです。「私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。」と、それ位の違いがあると言うのです。「ネフィリム人」に関して創世記には彼らは洪水の前に生きていたと記されています。洪水の後、何かの理由で滅んでしまったのでしょうか。ただ、このときには彼らと同じように、非常に背の高い強力な人として存在していたのです。

4. 彼らの結論

ですから、12人の斥候たちはカナンのでこのような巨人を見たのです。そして、彼らは大変な恐れを抱きました。意気揚々と出て行った12人の斥候たちのうちの10人はこれらを見て非常な恐れを抱いたのです。なぜ、そのようなことが起こったのか？私たちもよくやることです。この町を攻めなさいと言われて以上、当然、この町の人々に勝利できるかどうかを考えます。「その地に住む民は力強く、その町々は城壁を持ち、非常に大きく、そのうえ、私たちはそこでアナクの子孫を見ました。」という報告の通り、つまり、この町に攻め入ってこの人たちと戦って我々は勝利できるのかを考えたときに、自分たちは絶対に無理だと、その結論に達するのです。

彼らは主にではなく、自分たちの本能や経験に頼って人間的な判断をしたのです。人間的に見て、自分たちは彼らに勝利できるのか？絶対に無理だ！と。13 : 31—33にはカレブとヨシュアが主を信頼して攻め上ろうと言った時の10人の斥候たちの応答が記されています。「:31 しかし、彼といっしょに上って行った者たちは言った。「私たちはあの民のところに攻め上れない。あの民は私たちより強いから。」:32 彼らは探って来た地について、イスラエル人に悪く言いふらして言った。「私たちが行き巡って探った地は、その住民を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民はみな、背の高い者たちだ。」:33 そこで、私たちはネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。」と。

皆さん、ゴリヤテのことを思い出しませんか？ペリシテ人とイスラエルの戦いでゴリヤテという戦士が出て来ます。Iサムエル17 : 1—7を見てください。「:1 ペリシテ人は戦いのために軍隊を召集した。彼らはユダのソコに集まり、ソコとアゼカとの間にあるエフェス・ダミムに陣を敷いた。:2 サウルとイスラエル人は集まって、エラの谷に陣を敷き、ペリシテ人を迎え撃つため、戦いの備えをした。:3 ペリシテ人は向こう側の山の上に、イスラエル人はこちら側の山の上に、谷を隔てて対峙した。:4 ときに、ペリシテ人の陣営から、ひとりの代表戦士が出て来た。その名はゴリヤテ、ガテの生まれで、その背の高さは六キュビト半。:5 頭には青銅のかぶとをかぶり、身にはうろことじのよろいを着けていた。よろいの重さは青銅で五千シェケル。:6 足には青銅のすね当て、背中には青銅の投げ槍。:7 槍の柄は機織りの巻き棒のようであり、槍の穂先は、鉄で六百シェケル。盾持ちが彼の先を歩いていた。」、身長が2.97m位、着けている鎧の重さは56キロ以上、槍の穂先は6.8キロ、巨人です。そのときのイスラエルの様子が書かれています。11節「サウルとイスラエルのすべては、このペリシテ人のことばを聞いたとき、意気消沈し、非常に恐れた。」と、つまり、こんな人と戦うのでは絶対に勝てないと恐れたのです。

神は「行きなさい」と言われた。でも、実際に見たところ「これは勝てない、止めよう！」と。今見たゴリヤテに対するイスラエルと全く同じことが10人の斥候たちにも起こったのです。彼らは実際に状況を見て考えます。これまでの経験や常識に基づいて人間的な判断をします。勝利できるのかどうか？と。その結果、結論を引き出します。「これは絶対に勝てない」と。それでも彼らは分かっています。神はこの町々を攻めて滅ぼすようにと言われたことを。そうすると、彼らは恐れて「そんなことは絶対に出来ない。無理だ！不可能だ！」と。

恐れを抱いた彼らは当然勇気を失い、神が「行きなさい」と言われても怖気づくのです。「行きたくない、勝てないから」と。最初に言ったように、私たちも同じだと思いませんか？私たちもいろんな敵に遭遇したときにそれに勝てるのかどうかを考えて、とても勝てないとなると「私には到底無理だ、

できない」となって、私たちのうちから喜びが無くなり希望を失い、恐れに心が乱されてしまいます。まさに、これが10人の斥候たちに起こったことであり、彼らは民をこのように導いたのです。

このように考えた時、いったい神の前にだれを責めることができるのでしょうか？ 私たちも同じような弱さを持っています。でも、覚えておかなければいけないことは、この人たちは神に頼って行動しなかったということです。あくまで、彼らは自分たちの力で自分たちの知恵でやろうとしていたのです。その結果、「できない」という結論に達し、それでも「しなさい」という神の声を思うときに大変な恐れを抱いたのです。

B. 主が喜ばれた人たち : 二人の斥候

残った二人の斥候はどうだったのか？ 少なくとも、彼らは「神に喜ばれた」人たちでした。

1. 彼らの特徴 : 主を信じ、信頼していた

彼らの特徴は、神を信じ神に信頼を置いていました。

1) 主のみこころは必ず成就することを確信していた者たち

14 : 7-8 を見てください。ヨシュアとカレブはこんなことを言っています。「7 イスラエル人の全会衆に向かって次のように言った。「私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。8 私たちが【主】の御心にかなえば、私たちをあの地に導き入れ、それとを私たちに下さるだろう。あの地には、乳と蜜とが流れている。」と。この二人は、確かに強靱な人々が住んでいるし、大きな城壁があってそれを崩すことなどできないと思うけれど、これが神のみこころならその町々を征服することができると言ったのです。つまり、彼らは主のみこころならそれは必ず成就するということを確認していたのです。

2) 主への責任を知っていた者たち

14 : 9 「ただ、【主】にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」、彼らは主に対する自らの責任をしっかりと認識していました。この二人が言ったことは「私たちの責任は勝利するかしないかではなく、神のみこころに従うことだ」です。そのように言えるのは14 : 24に「ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、…」と「しもべ」とは「奴隷」という意味があることばです。ですから、この二人は「自分は神の奴隷に過ぎない、だから、私の責任はこの神に従うこと神を喜ばせることだ」とそのことを認識していたからです。

モーセが民にこのように言っています。申命記10 : 12-11 : 1「12 イスラエルよ。今、あなたの神、【主】が、あなたに求めておられることは何か。それは、ただ、あなたの神、【主】を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、【主】に仕え、13 あなたのしあわせのために、私が、きょう、あなたに命じる【主】の命令と主のおきてとを守ることである。」、モーセはこれから約束の地に入っていくイスラエルの民に向かって「あなたがたの責任はこの主に従うことだ。それが主に喜ばれることであり、あなたがた自身がこの地上にあって本当の幸せを得るカギだ」と言うのです。「14 見よ。天ともろもろの天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、【主】のものである。15 【主】は、ただあなたの先祖たちを恋慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた。今日あるとおりである。16 あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。17 あなたがたの神、【主】は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、18 みなしごや、やもめのためにさばきを行い、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。19 あなたがたは在留異国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったからである。20 あなたの神、【主】を恐れ、主に仕え、主にすがり、御名によって誓わなければならない。21 主はあなたの賛美、主はあなたの神であって、あなたが自分の目で見ただけの大きい、恐ろしいことを、あなたのために行われた。22 あなたの先祖たちは七十人でエジプトへ下ったが、今や、あなたの神、【主】は、あなたを空の星のように多くされた。」「11:1 あなたはあなたの神、【主】を愛し、いつも、主の戒めと、おきてと、定めと、命令とを守りなさい。」

そこでこのヨシュアとカレブに関して、民数記32 : 12に「ただ、ケナズ人エフネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアは別である。彼らは【主】に従い通したからである。』」と書かれています。彼らは最後まで主に従い通したのです。ヨシュア記14 : 8、9にも「8 私と一しょに上って行った私の身内の者たちは、民の心をくじいたのですが、私は私の神、【主】に従い通しました。9 そこでその日、モーセは誓って、『あなたの足が踏み行く地は、必ず永久に、あなたとあなたの子孫の相続地となる。あなたが、私の神、【主】に従い通したからである』と言いました。」とあります。

神が私たちに望んでおられること、主人である神が望んでおられることは「わたしの言うことに従って来なさい」です。カレブとヨシュアもほかの10人とともに見て来たのです。すごい城壁の町々を見たのです。強力なジャイアントがいる町を見たのです。でも、彼らは自分たちの見たことに心を奪われていますか？ 彼らは「神の約束に従うことが我々の務めだ」、だから、何があっても何を見ようと何を聞こうと彼らは主がやりなさいと言われることをやったのです。まさに、主の奴隷として生きたのです。

3) 主を信頼した者たち

そして、彼らはどんなときにも「主に信頼する」人物でした。14:9「ただ、【主】にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」、人々を見て恐れるのではなく神に信頼を置きなさいと言うのです。もしかすると、今のあなたにも必要なことかもしれません。いろんなことで心が塞いでいるかもしれません。必要なことは主に信頼することです。

4) 主の約束を信じた者たち

14:6-10、彼らは主の約束を信じたのです。「:6すると、その地を探って来た者のうち、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブとは自分たちの着物を引き裂いて、:7イスラエル人の全会衆に向かって次のように言った。「私たちが巡り歩いて探った地は、すばらしく良い地だった。:8もし、私たちが【主】の御心にかなえば、私たちがあの方に導き入れ、それを私たちに下さるだろう。あの方には、乳と蜜とが流れている。:9ただ、【主】にそむいてはならない。その地の人々を恐れてはならない。彼らは私たちのえじきとなるからだ。彼らの守りは、彼らから取り去られている。しかし【主】が私たちとともにおられるのだ。彼らを恐れてはならない。」:10しかし全会衆は、彼らを石で打ち殺そうと言い出した。そのとき、【主】の栄光が会見の天幕からすべてのイスラエル人に現れた。」、

彼らが立っていたのは自分たちが見たことではなかったのです。主のみことばに立ったのです。道理で神は彼らのことをお喜びになったはずです。

2. 主からの報い

14:24「ただし、わたしのしもべカレブは、ほかの者と違った心を持っていて、わたしに従い通したので、…」、神に喜んでいただきたいという思いを持って神に従い通したのです。当然、彼らに対して神はすばらしい約束をお与えになりました。14:23、29-30を見てください。「:23わたしが彼らの先祖たちに誓った地を見ることがない。わたしを侮った者も、みなそれを見ることがない。」、「:29この荒野であなたがたは死体となって倒れる。わたしにつぶやいた者で、二十歳以上の登録され数えられた者たちはみな倒れて死ぬ。:30ただエフネの子カレブと、ヌンの子ヨシュアのほかに、あなたがたを住ませるとわたしが誓った地に、だれも決して入ることはできない。」、神の報いは「ヨシュアとカレブだけが約束の地に入ることが出来る」でした。

皆さん、驚かれるでしょう。イスラエルの民の20歳以上はヨシュアとカレブ以外はだれも入ることができないのです。ということは、その中にモーセもアロンも含まれているということです。なぜなら、神はこの後、モーセが神の前に罪を犯すことを知っておられたからです。

結論=

「この二人だけがわたしに従い通した」と、これが12人の斥候たちの姿です。主の約束を知っていても、実際に自分の目の前に広がっているいろんな状況を見たときに、恐れを抱いて主に逆らった者たちです。同じことを見ても、「私の責任は主に従うことだ」として従い続けた者たち。片方は大変な災いをもたらしましたが、片方はすばらしい祝福をもたらしました。

信仰者の皆さん、私たちもこの二人に倣って歩むことです。私たちは次のことをしっかりと覚えて生きることです。なぜなら、そのときに私たちは災いではなく祝福をもたらす信仰者になるからです。

1. 見えるものによってではなく、主のみことばに立って生きる信仰者

私たちにはいろんなことが起こって来ます。それらによって私たちは確かに一時的に心が動揺するかもしれませんが、でもしっかりと「私は見えることによって生きるのではなく信仰によって生きる。神が言われることに従って信頼して生きる。」と、そういう歩みを神はお喜びになります。

私たちが何度も賛美する曲ですが、聖歌539にこのような歌詞があります。1番「見ゆるところによらずして、信仰によりて歩むべし、何をも見ずまた聞かずとも、神のみ約束に立ち、歩めよ信仰により、歩め歩め疑わで、歩めよ信仰により、見ゆるところにはよらで」と。今、私たちが見て来たことと全く同じことをこの賛美歌は歌っています。

神の約束を信じて神のみことばに立って生きるとき、少なくとも、私たちも二人の斥候のように祝福をもたらす者として生きるのです。

2. 自分の願いではなく、必ず為される主のみこころを求めて生きる信仰者

私たちが目指すことは、神のみこころが成されることを期待しそれを喜ぶ信仰者になることです。もちろん、私たちは見て来たように、私たちの必要を神の前に持っていくことは感謝なことに神は許してください。でも、私たちが本当に求めたいのは「神のみこころ」です。それが最善だからです。いろんな願い事を神の前に持って行って、同時に、神のみこころが成りますようにと、自分が願っていることがたとえ叶わなかったとしても、私たちはそれを喜ぶのです。必ずみこころが成されると。そういう信仰の歩みを皆さんはしておられますか？

思い出すのは、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの信仰です。憶えておられますか？ネブカデネザル王の像を拝まなければ火の燃える炉の中に投げ込むと。ダニエル書3：15－18「:15 もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」:16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。」:17 もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。」と、神は全能だ、たとえ火の中に投げ込まれても神のみこころならそこから救い出されると。これはすばらしい神への信頼です。神がどんな方かを知るその神がどんなことでもされると告白します。その後、「:18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」、神さま、どうか私たちを火の中から助け出してくださいと、そういう願いがあったでしょう。でも、彼らはもしそこで地上での生が終わったとしても「ハレルヤ！感謝です！」と。神のみこころがなるからです。自分たちの願いが叶わなければと、そんな信仰者ではありません。神のみこころが成ることに喜びを見出す、そんな信仰者です。

私たちの信仰も彼らの信仰に倣って、「私の欲しいものをください」ではなく、「主よ、あなたのみこころが成りますように」と、そして、そのみこころに本当の満足を見出す信仰者です。

3. 主に対する自分の責任を知っている信仰者

私は何のために造られ、何のために生かされ、何のために主は私を救ってくれたのか？偶然、今日を生きているのではありません。神が生かしてくださっているのです。私たちが覚えることは「私は主の奴隷である。私は主人である主を喜ばせるために生きるというその目的のために生きている。」ということです。このように生きているのか？そのことを考えて生きるのです。

この二人の斥候たちを見て私たちが教えられたことは、彼らは主のみことばに立っていたことです。神が言われたことを信じ、自分たちが見たこと、自分たちが感じたことには立っていなかったということです。主のみこころをいつも求めて、そのみこころだけが彼らを満足させるものでした。そして、私は主に仕える者、しもべとして主を喜ばせる者、それが私の願いだとしたのです。

彼らは神の前に喜ばれていました。私たちもこのように歩むなら確実に神が喜んでくださる。皆さん、**【主がお喜びになる信仰者が必要】**です。私たちが勝手に満足して「これでいい」とするのではなく、それを決めるのは神です。神がお喜びになることです。いろいろなことが起こって来ます。でも、彼らはその中で主に喜ばれる歩みをしました。それは私たちには希望でもあります。私たちもそのように歩むことができるのです。そのように歩むことを願って、そのことを可能にくださる神に頼って、みことばが教えるように歩んでください。今日が皆さんのそのような歩みの第一歩となることを心から願います。